後期計画の策定に向けた地域検討会議（第１回盛岡ブロック①）会議録
【盛岡ブロック①：八幡平市、岩手町、滝沢市、紫波町】

○　**日　時**：平成 31 年１月７日（月）14 時 00 分～16 時 00 分
○　**場　所**：岩手県公会堂　 21 号室
○　**出席者**
①　会議構成員
八幡平市関係者（資料「出席者名簿」のとおり）
岩手町関係者（資料「出席者名簿」のとおり）
滝沢市関係者（資料「出席者名簿」のとおり）
紫波町関係者（資料「出席者名簿」のとおり）
②　事務局（県教育委員会）
盛岡教育事務所（資料「出席者名簿」のとおり）
県教育委員会事務局（資料「出席者名簿」のとおり）
○　**傍聴者**：一般５人、報道１人
○　**会議の概要**
◆　**議題及び報告事項**
（１）　本県の高等学校教育の現状について
【県教委】
・　本県の高等学校教育の現状について、事務局から説明をお願いする。

【県教委】
・　資料 No. １「岩手県における中学校卒業者数及び高校入学者数の推移」、資料 No. ２「再編計画策定に係る取組及び「後期計画」検討スケジュール」、資料 No. ３－１「新たな県立高等学校再編計画の概要」、資料 No. ３－２「新たな県立高等学校再編計画（前期計画）の推進状況」、資料 No. ３－３「高校教育を巡る最近の動き」、資料 No. ４「県立高等学校の入試状況の推移（全日制）」、資料 No. ５「中学生の進路希望等に関するアンケート結果」に基づき説明。

【平澤　岩手町教育委員会教育長】
・　平成 31 年１月４日の新聞に「高校普通科を抜本改革」という記事が掲載された。この内容によっては今後の高校再編における考え方が根本から変わる可能性が考えられるため、詳しい情報があれば教えて欲しい。

【県教委】
・　文部科学省から正式に発表されたものではないため、現在のところは詳しい情報はない。今後、動きかがあった場合については情報提供させていただきたい。

（２）　後期計画策定に向けた意見交換

＜意見交換テーマ＞ 都市部、中山間地・沿岸部における今後の高校のあり方について

【県教委】
・　本県の高等学校教育の現状と課題を踏まえ、意見交換テーマに基づいた御意見をいただきたい。

【田村　八幡平市長】

・　以前、県議会議員として商工文教委員会に所属しており、学校教育、特にも高校教育については高い関心を持っていた。当時の委員会では総合学科の設置に関する議題が多かったが、生徒の減少を見据え高校再編についても検討していれば良かったのではないかと反省している。
・　昨年 10 月、県内全市町村を会員とする「岩手の高校教育を考える市町村長懇談会」を設立した。当初は「統合反対」「学級減反対」という意見が強かったが、「今後の岩手の高校教育をどのように進めていくか真剣に検討すべき」「今後の岩手県を担っていく高校生をどのように育てていくかについて考えていこう」と意見がまとまり、「〇〇反対」という項目を削除することになった。
・　平成 30 年 8 月の文部科学省の通知では、地域と高校が密接に連携をとりながら教育を進めていく重要性を示しており、高校入学者数が減少するため高校を統合するという旧来の考え方ではなく、時代が変化する中、どのようにしたら岩手を支えていく子供達を育てていくことができるのかという考えで高校再編を検討していただきたい。
・　岩手の高校に入学したいという県外生徒の受入れをしやすいような環境を作ってほしい。県外からの生徒の受入れについてはこれまでも様々な場面で意見を述べてきたが、現在の再編計画には盛り込まれていない。今後の検討会議では県外受入れも視野に検討を進めていただきたい。

【佐々木　岩手町長】

・　町の経営者である町長として、人口減少の課題に立ち向かっていかなければならず、危機感を持っている。
・　高校が町に存在することは、人口を保つ大事な要素の一つであり、高校の存続は町づくりと直結している。文部科学省の通知では多方面での様々な地域との連携が謳われているが、それを具現化していく再編改革を策定していかなければならないと考えている。
・　高校が小規模校化していくとしても高校が町にあるということは、町が存続していくためのキーになると考えている。そのためには県外からの生徒の受入れだけではなく、東南アジアなど外国から入学生を受け入れる等の視点が必要であると考えている。これまでの感覚ではなく、経営的な感覚で制度設計をしていくことが大切であると思う。
・　20 年後、人口は現在の約半数になると予測され、今後いかに地域人材を育成していくかが、町の存続のキーになる。

【熊谷　紫波町長】

・　現在の再編計画については、ある程度、県の実情に配慮したものであり、評価すべきものであると考えている。
・　自治体に高校がないということは運営上マイナスであると、どこの市町村も考えており、今後の地域を担っていく人材育成のためには、高校は必要である。
・　紫波町には紫波総合高校が設置されているが、総合学科の位置づけや教育内容を精査する時期が来たのではないか。農業高校、商業高校、工業高校等の専門学科の入学生も減ってきている中、総合学科の教育内容を精査し、魅力のある学科としていってほしい。

【遠藤　八幡平市商工会事務局長】

・　本県のみならず全国的に地域産業を支える担い手が不足しており、その確保が大きな課題となっており、地域における高校の役割がクローズアップされてきている。
・　八幡平市には平舘高校が設置されているが、地域の伝統行事等にも積極的に参加しており、地元企業からは積極的に卒業生を受け入れたいという声もある。平舘高校においては進学する

生徒も増加し、就職希望者が減ってきているが、ほぼ100%の就職率を維持してきている。

- 広大な県土である本県の特長や観光資源等を踏まえながら、高校再編について協議してほしい。今年度はラグビーワールドカップ、来年度はオリンピックが開催され、本県でもインバウンドによる外国人観光客が増加してきている。グローバル化が進んでいる中、小中高校におけるキャリア教育などを通し、県内それぞれの地域の特色を踏まえながら、各市町村との連携を深めた教育についても検討していただきたい。

【小澤　新岩手農業協同組合常務理事】

- 今後の農業を考えた場合、ＡＩなどの技術革新を取り込めるような後継者の育成をしていく必要があり、そのような教育ができる農業高校にしてほしいと考えている。
- 各市町村に高校が設置されている方がよいとは思うが、中学校卒業予定者数が減少していく中では、高校を統合し魅力ある高校をつくっていくことも、やむを得ないと考えている。統合し、多様な学科を設置する高校をつくり、中学生にとって魅力のある高校としていくことも必要である。
- 高校を統合する場合には、保護者の負担とならないように、民間業者などと契約し、通学が困難な生徒のための寮の設置などの環境整備や助成が必要ではないか。寮を整備することで県外生徒を受け入れることができる。また、統合による学級数の増加は部活動の活性化にもつながり、このような取組が学校の魅力づくりになると考えられる。
- 望ましい学校規模を４学級以上としているが、ある程度の学校規模を確保することは学校の魅力づくりにつながると考えられる。中学生が望む学習環境や部活動等を整備するという視点で高校再編を検討してほしい。

【八戸　岩手町商工会　会長】

- 県内の中小企業では人材不足が課題となっている。高校においては優秀な人材の育成に努めてほしい。
- 現在、地域にある各高校はそれぞれ存在価値があるので存続してほしい。
- 地元の沼宮内高校は町と連携し、生徒数を増やそうと様々な取組を実施している。そのような地域の取組状況も考慮しながら高校再編について検討していただきたい。
- 県外からの生徒の受入れも認めていく必要があると考えている。沼宮内高校の特色の一つにホッケー部があるが、現在は町内の選手が中心である。県外からの入学希望者もあるので県外生徒の受入れについても検討していただきたい。

【福士　岩手町農業委員会】

- 農業は現在転換期を迎えており、ピンチをチャンスに変えていこうとしているところである。
- スマート農業に向け取り組んでいるが、高校ではＡＩ等を使いこなせる次世代を担う人材を育ててほしいと考えている。また、岩手県の県民性である優しさや思いやりのある子どもたちを育てるとともに、ピンチをチャンスに変えて動けるような多様性を身に付けさせてほしい。

【阿部　滝沢市商工会長】

- 中小企業の課題としては、少子化の問題もあるが、高齢化という問題もある。
- 参考資料№５（平成30年度中学生の進路希望等に関するアンケート）の設問11「10年後どこに住んでいると思いますか」の回答では、中学生の県外への流出希望が強く、将来に不安を感じた。
- 現在、子供たちの目線に立って、企業でも就業環境の改善等に取り組んでいるが、少子化とはいえ、高校再編についても前向きに検討してほしい。

・　仕事柄、年２回程度東南アジアを訪問するが、現地には高校卒業後に日本で働きながら学びたいという者が相当数いる。今後は外国人が学べる環境が必要になることが考えられ、その検討を進めることで前向きに高校再編を考えていくことができるのではないか。
・　幼稚園、小学校、中学校、高校と子供が育っていく中では広がりが必要であり、高校の学級規模は２学級以上、更に４から６学級程度が一般的には望ましいと思う。しかし、地域によっては様々な事情等があるので、検討の中で地域の意見を十分に取り入れて進めてほしい。

【田沼　新岩手農業協同組合滝沢支所長】

・　高校教育では、もっと地域に目を向けた教育が必要ではないか。就職希望の生徒に対しては、どのような業種があるかよく理解し、進路選択できるようにキャリア教育を進めていく必要がある。また、進学希望の生徒に対しても、単に大学に入学したいではなく、大学進学後にどのような職業に就きたいかを見据えた進学指導が必要である。
・　中学生が希望する高校に進学できる環境づくりも必要であるが、もし、希望校に合格できなくても、再チャレンジできるような体制づくりが必要であると思う。

【細川　岩手県農業農村指導士】

・　参考資料№.５（平成 30 年度中学生の進路希望等に関するアンケート）の農業科の希望が約 3%であったの見て、あまりにも希望者が少なく愕然とした。しかし、現在、県内には農業学科が 14 学級あることで安心した。
・　高校を卒業して直ちに就農するということは難しく、また、就農を目指す大学生も少ない。高校で農業の魅力を伝える教育をしていかなければ、卒業後に就農せず、安易に進学を選んでしてしまう。
・　農業をしていくには規模や条件等があるため、全ての希望者が就農できるわけではないという課題があるが、農業経営についての学習など、就農に向けた教育内容を充実してほしい。
・　地元の紫波総合高校では農業科目を選択し、学習できる環境にはあるが、総合学科ではもう少し専門的な農業を学べる環境を整えてほしい。

【冨岡　（株）富岡鉄工所代表取締役】

・　紫波地区は開発が進み、宅地が増えていることから中学生の減少は少ないと感じているが、紫波総合高校では町外の生徒が半数以上であり、2020 年度の学級減についてはやむを得ないと考えている。
・　しかし、紫波総合高校の生徒は夏祭りボランティアへ参加したり、実習で作ったジャム販売での地元企業と連携等を行い、魅力ある学校づくりに取り組んでいる。今後も、入学者確保に向け地元企業としても努力していかなければならないと感じている。
・　再編計画では、社会情勢の変化によっては学級減の延期もありえるとの説明があった。自動車産業、半導体、ＩＬＣが岩手の主幹産業になりえるとの新聞報道等がある状況の中で、再編計画では盛岡工業高校の１学級減が示されている。どの学科が減るかについてはまだわからないが、これから岩手を支える人材として工業系人材は必要ではないか。人口減少や少子化による高校再編と工業高校の再編は別に検討していただきたい。
・　今年度入試では電気科が定員を割っているが、これまで高い入試倍率が続いていた。特にも土木科の倍率が高く、これは小学生の時に震災を経験した子供たちが、何らかの思いを持って高校を希望しているからではないか。また、建設業協会を通した様々な取組の成果もあるのではないかと考えている。
・　高卒求人数が増加する中、特にも土木技術者が足りないといわれており、県内においても土木の人材確保が課題となっている。盛岡工業高校には県内唯一の建築デザイン科もある。工業

技術者の人材育成が切望されている状況の中では、工業高校の再編は現在の社会情勢には合わないのではないかと考えており、再度検討していただきたい。

【齊藤　八幡平市ＰＴＡ連絡協議会】

・　高校１年生の息子がいるが、交通の便などから平舘高校には入学せず、秋田県の花輪高校に入学した。交通の利便性向上、通学や下宿などの支援があれば、県内の色々な高校の選択肢が増えるのではないか。
・　八幡平市内の小中学校の校長、副校長が同時に異動することが頻繁すぎると感じている。ことのことについて、八幡平市教委に対して要望したが、人事については県教委の管轄だと言われた。地域振興や教育振興を考えていく上で、学校の管理職が同時に異動することは様々な活動が阻害されるため配慮してほしい。

【松浦　岩手町ＰＴＡ連合会】

・　地元の高校がなくなると、高校への通学が不便になり、保護者の負担増につながる。

【山口　滝沢市ＰＴＡ連絡協議会】

・　盛岡農業高校を希望する生徒が多いが、将来農業をしたいと考えて入学しているのではなく、保護者の負担を考えて、本当の希望の高校へは入学せず、家から近い高校を選択するケースがあると思う。
・　魅力ある県立高校は少ないと感じている。私立高校はオープンスクールを開催しており、高校の魅力を発信している。
・　県立高校は私立高校に比べて部活動の面での魅力が少ない。学習面も大切であるが部活動の魅力も大事だと思う。地域と協力しながら魅力ある県立高校を目指すことで入学生が増えるのではないか。
・　私立高校のように県外からの生徒も受入れながら、魅力ある県立高校をつくっていったらよいのではないか。

【森川　紫波町ＰＴＡ連合会長】

・　地域の学校の役割を重視しながら再編計画を進めていくとのことであるが、地域のニーズや実情については各高校が良く理解していると思うので、各校の特色づくりにおいては各校に裁量を十分に持たせてあげてほしい。
・　学校経営を考えるとトップの校長、副校長を一定期間留めておくような人事配置が必要ではないか。短期間に異動してしまうようでは、特色ある学校を作ったとしても絵に描いた餅のようになるのではないか。

【星　八幡平市教育委員会教育長】

・　12 月の市議会において、平舘高校の１学級減についての質問が出されており、市議会議員も危機感を感じている。平舘高校の卒業生は地域産業の担い手になっていることから、今後の状況について様々な質問が出された。
・　八幡平市では、これまで平舘高校に対する様々な支援を行っており、今後も新たな支援策を考えていきたいと思っている。
・　来年度から平舘高校が１学級減になるが、教職員も２、３名ほど減になるのではないかと考えている。その場合、マンパワー不足から進路希望に対応する科目の開設が困難になるのではないかという心配がある。
・　平舘高校の普通科は毎年 50 名程度の入学者があるが、２学級のため１学級 25 人程度の少人

数指導が可能であった。１学級減になると１学級 40 名での指導となることが想定され、個別の支援が難しくなるのではないか。

・　学級減に対する激変緩和措置としての教員加配等、支援策については県教委ではどのように考えているのか伺いたい。これは平舘高校のみではなく県内全ての高校では学級減等によって生じる課題だと思う。後期計画を策定していく上でも、学級減等に関しての県の支援策の担保があれば地域にとって納得できる計画になるのではないか。

【平澤　岩手町教育委員会教育長】

・　アンケート結果を見ると普通高校を希望する生徒が若干増加したとのことであったが、この理由としては、将来の目標を見つけられない生徒が将来の方向性を決められず普通高校を希望する傾向が多いことが考えられる。その結果が普通高校を希望している生徒が多いということであり、中学生の希望のみを判断材料として設置学科を決めることはできないのではないか。

・　将来は畜産業に就きたいために盛岡農業高校を希望する生徒や、１年生の時から工業関係を学びたいから盛岡工業高校を希望し、もし叶わなければ福岡工業高校という将来の方向性をしっかり持った生徒もいる。中学校では職場体験等も実施ししながらキャリア教育にも力を入れているが進路アンケートを実施すると６割が普通高校を希望するという状況もある。

・　平成 30 年１月４日の新聞に高校普通科を抜本改革という記事があった。課題を見つけ、その解決方法について集団で討議し課題解決していく学習に小中学校では力を入れて取り組んでいる。高校においても地域課題の解決学習の取組が進んでいけば、町内での高校生の活動が増え、その高校生のパワーを地域の方々がもらい、地域の活性化につながっていくのではないか。これが実現するよう新聞報道の内容が具体化するまで後期計画の策定は延期してもよいのではないか。

・　魅力ある教育課程としていくために、高校教育においては教科横断的な学習が求められており、高校教員はもっと研鑽を積んでいかなければならないと感じている。

・　再編計画においては１学級定員 40 人の規準で判断しているが、その判断基準を見直してほしい。

・　岩手町では４年間で小中学校６校閉校したが、その判断基準は「複式学級の解消」、「中学校は学年２学級以上」の２項目である。統合前は、１学級で教員１人、生徒１人の１対１の授業を行っており、学校教育とはいい難い状況が続いていた。地域の合意形成を図り統合を行ってきたが、高校教育の場合は、統合は地域の存続に関わる問題である。

・　生徒数のみで判断するのではなく、高校再編計画は様々な意見を踏まえて策定されたものであることは理解しているが、今後の国の動きを見ながら、柔軟に考え、市町村との連携等も含めながら、より良い後期計画の策定に取り組んでいただきたい。

【熊谷　滝沢市教育委員会教育長】

・　平成 27 年度の再編計画の策定時にも地域検討会議に参加させていただいたが、様々な意見を集約し策定された再編計画であると評価している。

・　県内に魅力ある高校ができて生徒が選択できるようになればよいと思う。

【侘美　紫波町教育委員会教育長】

・　なぜこのような後期計画を策定したのかという理由をしっかりとしたものとしていければよいと思う。

・　紫波町のオガール（公民連携による紫波中央駅前に拡がるまちの開発事業）はある程度盛り上がってきているが、専門家からはこのままでは将来的には廃れるとの意見をいただいている。縮減時代にどのように対応していくかということを考え、多様性をもって対応していかなけれ

ば事業の継続も危うくなっていく。

- 現状説明では society5.0 にも触れていたが、今後の教育においては理数系と文系を融合させていったほうがよいとの意見もあり、これからは、職業観や職種も変化していくことについて子供たちに適切に教えていく必要がある。
- 紫波町教委では花北青雲高校卒の２名を採用し、盛岡工業高校からも２名配置になったが、使命感を持ち、大変よく働いてくれている。高校教育においては、卒業後に直接就職する生徒への対応、進学への対応等様々な選択肢へ対応できる環境が必要である。
- 紫波総合高校の入学生は、約６割が盛岡市や北上市など町外からの入学生である。中学生が希望する高校としていくためには、総合学科として既存の系列だけではなく横断的な何か新しい系列もあったほうが魅力が高まるのではないか。例えば起業など新しい社会に挑戦できる仕組みはどうか。人生 100 年時代であり、退職後 40 年生きていくための基になる考え方を身に付けることができる系列をつくれば、更に町外から入学生を呼び寄せることができ学校の魅力が高まると思う。

【小山　岩手地区中学校長会】

- 中学校卒業者数が減ることによって倍率が下がり、学習意欲の低下につながることへの懸念が中学校教員間で話題になる。
- 生徒と面談をすると、高校選択理由としては部活動の面が大きいと感じている。高校卒業後の進路については高校に入学してから考えたいという生徒が多いので、各校でもっと魅力ある特色を出して欲しい。
- 中山間部や沿岸部の高校の生徒の学力差は大きく、また多様な進路に対応していかなければならないため、教職員の配置については配慮していかなければならないのではないか。

【内田　紫波郡中学校長会】

- 県北の山間部の学校に勤務したことがあるが、家庭事情や交通の便が悪いこと等で希望の高校への進学をあきらめていた生徒がいた。岩手県は県土が広いため、魅力的な学校をあっても、その学校へ通学ができない場合があるため、スクールバスなどの通学支援が必要なのではないか。
- 現在の勤務校では工業高校を希望する生徒が多い。部活動で希望する生徒もいるが、将来は電気関係の職業に就きたいなど目的意識がはっきりしている生徒もいる。どのような学習ができるか高校のイメージをしっかり持つことができれば高校を選択できるが、高校でどんな授業をしているのかわからない生徒、進路の目標を見つけられない生徒は普通高校を選択する傾向が強い。
- これからどんな社会になっていくのか、どのような人材が必要とされるのかをイメージできる授業があれば魅力的であると思う。県内の子ども達はなんとなく入れる高校を選ぶ傾向がみられ、活力が弱く、おとなしくなりすぎていると感じている。
- 地方で世界と勝負しようという意気込みを持てるように、他県であるような地元企業と大学の提携による研究というような取組を実施していければよいと思う。

【県教委】

- 県外からの生徒の受入れに関しては、昨年度から２年間、有識者による検討を進めていただき、その検討内容をまとめ、８月に報告書をいただいている。その中では県内の生徒の学ぶ機会の確保に配慮することを前提とした上で、ある程度の県外からの生徒の受入れを認めるべきとの提言をいただいている。また、県外から受け入れる場合においても、生徒の生活面の環境を整えておくことが必要であるとされている。提言を受け、現在、県教委では今後の対応を検

討しているところである。

- 教職員配置について管理職の異動が頻繁すぎるとの意見をいただいたが、教職員配置を所管する部署に情報提供していきたい。
- 高校教員の配置については、高校標準法をもとに配置されるが、この法律は１学級定員を 40 人を規準として、国からの助成があるところ。現在は、復興加配もあり、軽重を付け各校に配置しているが、県全体でのバランスをみながら配置を考えていく必要があると考えている。
- 現在７校の１学級校には、単純に学級規模のみで教員配置数を決定しているのではなく、加配等の配慮を行っているところ。
- 魅力ある学校づくりについては、高校を選択する中学生にとっての魅力という視点から新たな取組を進めていくということだけではなく、現在の各高校の取組についてこれまで以上に情報発信していく必要があると考えている。
- 入学した高校生にとっての魅力としては、就職や進学という進路実現ができる取組が必要である。地域にとっての高校の魅力としては、地域人材の確保という要望も強いため、県内就職率の向上を目指した取組の推進に力を入れていきたい。キャリア教育として地域企業や関係団体から協力いただきながら様々な取組を行っている高校もあり、そのような取組を通じて地域理解にも努めていきたい。
- 工業人材の育成についての意見もいただいたが、再編計画の推進においては、実際の学級数調整については、産業振興の方向性や産業界のニーズを踏まえ適切に判断していきたいと考えており、平成 31 年度に学科改編を予定していた水沢工業高校については社会情勢等の変化を踏まえ学科改編を延期したところ。盛岡工業高校については、生徒が盛岡一極集中している状況や工業人材のニーズの高まり等も踏まえながら、適切に判断していく必要があると考えている。

【田村　八幡平市長】

- 次回の地域検討会議では私立高校の入学者数や在籍者数に関する情報もいただきたい。
- IT 関連について学ばせ、第一次産業を盛り立てるような農業高校の経営をしたいという企業もある。高校の経営となると難しい面があると思うが、地元企業と連携しながら農業高校において最先端の授業を行っていくことも考えられる。

【県教委】

- 再編計画の策定においては、教育の機会の保障と教育の質の保証を大きな柱としているが、この二つを両立させることは非常に難しいことであると考えている。
- 今回いただいた意見の中にも、学科のあり方や魅力ある学校づくり、県外からの生徒の受入れ、家庭負担の軽減を考えた高校の配置等様々な御意見があった。再編計画においては、これらを両立させていかなければならず、これを両立させていくためは、更なる皆様の多様な意見が必要である。
- 以前と比べ、現在の高校では地域との連携に取り組み、地域の教育資源を活用しながら学んでいる。地域課題を教材にしながら探求する力を身につけていくということは、地域の協力がなければ実現できないことである。
- 県外からの生徒の受入れについては今後取り組んでいく予定であるが、具体化していく中では、後期計画にも取り込んでいく必要があると考えている。

資料

後期計画の策定に向けた地域検討会議（第1回 盛岡ブロック①）
出 席 者 名 簿

No	市町村等	氏　名	所　属・役　職　等	備 考
1	八幡平市	田　村　正　彦	八幡平市長	
2		遠　藤　収　一	八幡平市商工会　事務局長	
3		小　澤　和　弘	新岩手農業協同組合　常務理事	
4		齊　藤　正　樹	八幡平市ＰＴＡ連絡協議会（八幡平市立安代中学校ＰＴＡ会長）	
5		星　　俊　也	八幡平市教育委員会　教育長	
6	岩手町	佐々木　光　司	岩手町長	
7		八　戸　保　彦	岩手町商工会　会長	
8		福　士　好　子	岩手町農業委員会	
9		松　浦　智　也	岩手町ＰＴＡ連合会（岩手町立一方井中学校ＰＴＡ会長）	
10		平　澤　勝　郎	岩手町教育委員会　教育長	
11	滝沢市	阿　部　正　喜	滝沢市商工会　会長	
12		田　沼　伸　也	新岩手農業協同組合滝沢支所　支所長	
13		山　口　恒　司	滝沢市ＰＴＡ連絡協議会（滝沢市立滝沢第二中学校ＰＴＡ会長）	
14		熊　谷　雅　英	滝沢市教育委員会　教育長	
15	紫波町	熊　谷　　泉	紫波町長	
16		細　川　勝　浩	岩手県農業農村指導士	
17		冨　岡　靖　博	㈱富岡鉄工所　代表取締役	
18		森　川　高　博	紫波町ＰＴＡ連合会　会長（紫波町立紫波第一中学校ＰＴＡ会長）	
19		侘　美　　淳	紫波町教育委員会　教育長	
20	地区中学校長代表	小　山　孝　治	岩手地区中学校長会（滝沢市立滝沢南中学校長）	
21		内　田　興　子	紫波郡中学校長会（紫波町立紫波第二中学校長）	

【オブザーバー】

No		氏　名	所　属・役　職　等	備 考
22	県議会議員	千　葉　　伝	岩手県議会議員	
23		工　藤　勝　博	岩手県議会議員	
24		ハクセル美穂子	岩手県議会議員	
25		柳　村　岩　見	岩手県議会議員	
26		田　村　勝　則	岩手県議会議員	
27	県立高等学校	菅　原　尚　志	盛岡第二高等学校長	
28		佐　藤　一　義	盛岡北高等学校長	
29		岩　渕　健　一	盛岡農業高等学校長	
30		長谷川　昌　生	沼宮内高等学校長	
31		太　田　優　子	平舘高等学校長	
32		馬　場　香　樹	紫波総合高等学校長	
33		西　　崇	盛岡工業高等学校 副校長	

【県教育委員会】

No		氏　名	所　属・役　職　等	備 考
34	県教育委員会事務局等	小　林　　満	盛岡教育事務所主任指導主事	
35		村　松　雅　彦	盛岡教育事務所指導主事	
36		岩　井　　昭	教育次長	
37		佐　藤　　有	学校調整課首席指導主事兼総括課長	
38		小久保　智　史	学校教育課総括課長	
39		森　田　竜　平	学校調整課学校調整担当課長	
40		藤　澤　良　志	学校調整課高校改革課長	
41		宇夫方　　聰	学校調整課高校改革担当主任指導主事	
42		梅　澤　貴　次	学校調整課高校改革担当主査	
43		市　丸　成　彦	学校調整課高校改革担当指導主事	
44		谷　地　信　治	学校調整課高校改革担当指導主事	